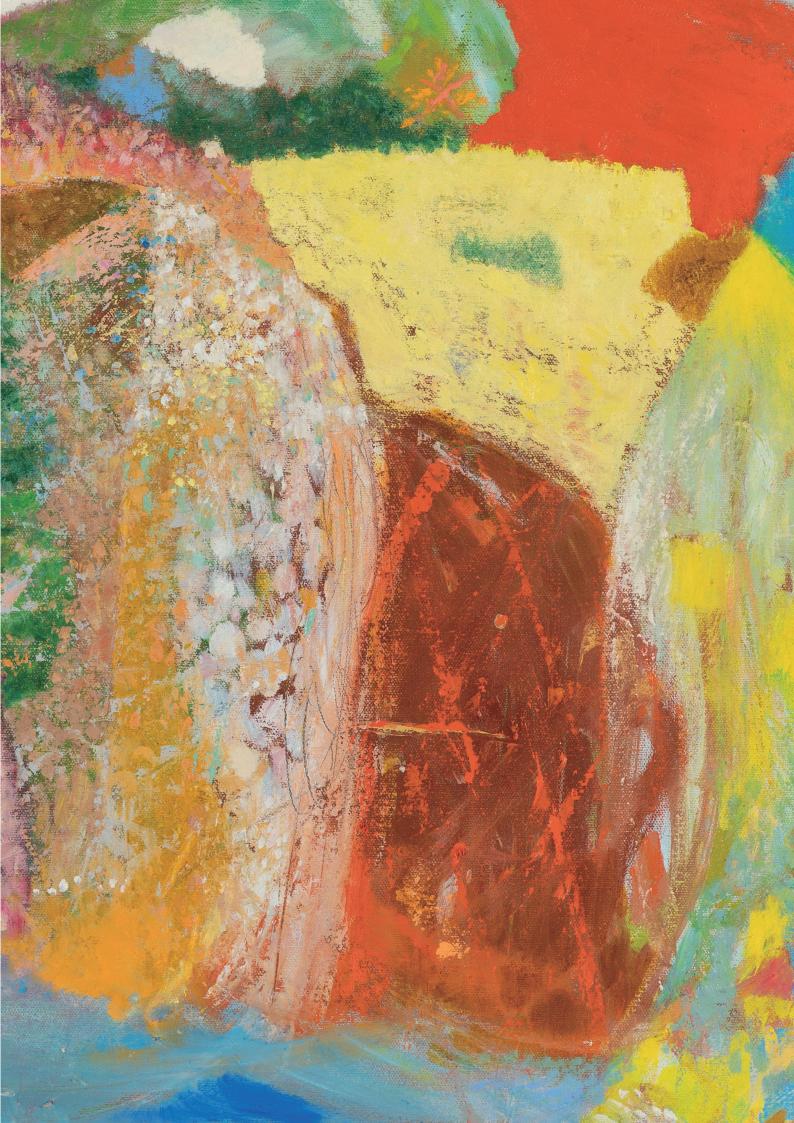


ミドリナ 白書 midorina White Paper







P.2-3

# 「快の森」

寺井茉莉子

2022年 油彩、カンヴァス 606×727mm

# P.06 はじめに

# P.07 1. ソーシャルフォレストリー都市の具体像

浸透する森

森が育む仕事/ビジネス 森がつなぐ地域/コミュニティ 森が支える生活/ライフ

# P.09 2. ソーシャルフォレストリー都市への道筋

# (1) 森感度を高める

森と学び 多様な学び、仕事、生き方 ロングスパンで学ぶ 体験を重視する 生きものに目を凝らす

# (2) 快=心地よさを知る

森と住宅 森と道具(什器) 森とエネルギー 森と風景 森と癒し 森とをしクリエーション 森と食 森と前り 森と削造 森とDIY

# P.20 3. ソーシャル・フォレストリー都市を実現する仕組みづくり

「市民の森」がお手本に
「使いたい」と「使ってほしい」をつなぐ
「里山レンタル」など新しい仕組みづくり
森林所有者にメリットを
事例を積み上げる
森の情報をオープンに
政策の支援体制をつくる
顔が見えるネットワーク
森林イノベーションのメッカへ
産学官民の連携

# ミドリナ白書

# ~人と森の未来、その「心地よい関係」を描こう!~

# はじめに

国際社会では「SDGs= 持続可能な開発目標」の考え方が広がりつつあります。 国では「脱炭素」の取り組みとして 2050 年までにカーボンニュートラルの 実現を目指しています。私たちにも将来の世代が安心して暮らせる「持続可 能な社会づくり」を考え行動に移すことが求められる時代になりました。

私たちの身近にある森には樹木をはじめ多様な生命があります。適切に管理すれば二酸化炭素を制御したり土砂災害を防いだりできます。再生の循環によって産業に不可欠な資源や文化的な価値を与えてくれる森は、「人の幸せ・地域の幸せ = 持続可能な暮らし」に欠かせない存在です。大袈裟ではなく「森と市民のより良い関係」を考え実践することが「地球規模の環境問題の解決」につながり次世代を豊かにする一助となるでしょう。

伊那市は50年先の未来を見据え「社会林業都市(ソーシャルフォレストリー都市)」の実現を目指し、2016年「伊那市50年の森林(もり)ビジョン」を策定しました。これは「山(森林)が富と雇用を支える50年後の伊那市」を基本理念とし、市民を主役とした新たな地域社会の創出を目指しています。

「ミドリナ白書」は、伊那市 50 年の森林 (もり) ビジョンの「具体像」とその「道筋」を市民の目線で描く手引き書です。その基準にすえているのが「森感度」と「快=心地よさ」です。市民一人ひとりが暮らしの中で森や木との関わりから自然への感度を高め、人と森のつながる心地よい社会をつくることを目指しています。

「伊那市ミドリナ委員会」は伊那市 50 年の森林 (もり) ビジョンを広く市民 にお伝えするサポートのための組織です。この白書は、委員会の主催する「ミドリナ白書シンポジウム」(2020 年) や「ミドリナ café」(2018 年から継続 的に年間複数回開催) などを通じて、様々な立場の皆さまからいただいた意見を反映し作成いたしました。

# 1. ソーシャル・フォレストリー都市の具体像

# 浸透する森

日頃から森や木と深く関わっている人だけでなく、街の中で暮らしている 人にとっても森や木を身近に感じることができる社会。そんな豊かな50年先 を想像したい。森に始まるビジネスやコミュニティ。それらが彩るライフ。

建物や家具、エネルギー、水、食、学び、遊び、仕事など、私たちの暮ら しの中にある様々な要素は、「森の恵み」に由来するものとなるでしょう。暮 らしのすみずみに「浸透する森」。

ここに暮らす人たちは地域の森をみんなが共有する資本として大切にあつかっています。その本質を感じられる力が「森感度」です。森の抱く経済の価値とともに無形の恩恵を知っており文化として根付いています。例えば金属や化石燃料由来の人工的な素材も、可能であれば木材などの天然素材に転換していく考え方が浸透し、無理なく実践されています。

# 森が育む仕事 / ビジネス

「森が浸透する社会」は、突然私たちの前に現れるわけではありません。そこに至るまでには森や木を活かした多様で小さなビジネスが、従来の「林業」の枠にとどまることなく地域で数多く生まれ、消費者目線でのイノベーションと雇用が創出されている必要があります。

それらのビジネスは、地域の歴史や伝統、風土と共存し、人にも森にも「快 =心地よさ」を伴いつつ持続的に発展するでしょう。森林を活かしたビジネスは「森の恵み」という「価値」として地域を循環し新たな文化を形づくります。 そのように社会や暮らし、世の中に森が浸透することで価値観も変わっていきます。

# 森がつなぐ地域/コミュニティ

50年先の地域社会は自治活動としての森の活用も盛んになるでしょう。豊かな自然環境を有する伊那市は、現在の少子高齢化が進んだ人口減少社会においても、都市一極集中の分散化や半農半X、リモートワークやDIYの浸透が進むライフスタイルの中で、人口流入とともに一定の交流人口・関係人口があります。

これまで集落の人たちが管理を担っていた森は、新たな世代により域外の 多様な人たちも加わった形で森の多様な利活用パターンへと生まれ変わって います。

このような「森の自治」とも呼べる地域活動は、地域のボランティアにと どまらず、例えば薪づくりの共同作業による「エネルギーの地産地消」、様々 な林産物を価値化した「地域通貨の流通」、子供の遊び場の共同運営など、多 様で特色ある取り組みへと発展し、そこから生まれる価値が楽しさを伴って 地域をめぐっています。

### 森が支える生活 / ライフ

住まいを筆頭に、家具、食器、道具類など日々の暮らしに欠かせないモノたちは、洗練されたデザインと優れた機能性を合わせ持つ自然素材が人々に愛されています。作り手たちの顔が浮かぶ「売る-買う」の関係は、使い手に丁寧な扱いと愛着をもたらし、経年美化がモノを選ぶ当たり前の基準となって長く使われています。

住まいや公共施設の近くには誰でも入れる森が街中にもあり、日々の散歩に休日の憩いや団欒に、森で過ごすひとときが楽しみやリフレッシュ、そしてインスピレーションを得る場とされています。子どもたちは、自分たちの足で行ける身近な森が毎日の遊び場です。

たっぷりと森で過ごす子供時代は、森の中の多様ないのちと交わる時間であり、その後の彼らの生きる基盤となるでしょう。病院や福祉施設、学校には森が併設され、心身の健やかさの回復、維持、学び、そして癒しとして活用されています。

暮らしの根底を支えるエネルギーは、効率的で安全な燃焼機器で薪やペレット、ウッドチップなどの芯から温まる木質燃料が広く使われ、太陽光や水力など他の自然エネルギーとのミックスも進んでいます。すべてが循環し、バランスが保たれる森の生態系のように、私たちの暮らしもバランスがデザインされてゆきます。

# 2. ソーシャル・フォレストリー都市への道筋

もりかんど

# (1) 森感度を高める 森と学び

「森感度」を高めて「森が浸透する社会」を実現するためには、人々の意識の中に、森の働きや森の恵みへの理解と、「それらを持続的に活かしてこそ我々も生かされる」といった哲学が宿っていることが大切です。それには「学び」が必要です。

幕末から明治維新を経て近代的発展を遂げた過程で最も重視された一つが 人材の教育・育成です。高遠藩の藩校「進徳館」もその大きな役割を果たし ました。社会をより良く変えようとするならば、正しい価値観を育める「学 び」に変えていくことは必然です。「浸透する森」は「暮らし」の中に見つけ ることができます。「暮らしを起点に学ぶ姿勢」は普遍的でありながら現在の 私たちにとって新しい教育として多くの発見があるでしょう。

地元の木工製品を使うことは、森林整備、産業振興、経済の循環など良いことだらけですが「みんなで買いましょう!」と啓発をしてもなかなか購買意欲につながりません。「プラスチックの方が安価」「木製品は壊れやすい・汚れやすい」などの思いが「木の欠点」として人の意識に擦り込まれているのかもしれません。

木製品は少しの手間を加えれば綺麗に生まれ変わらせることができます。 経年で味わいのあるものに変わります。使えなくなっても燃料にできるなど 廃棄コストは最小です。わが国には身近な天然素材を工夫しながら長く使う 文化があり、そのための知恵も暮らしの中にふんだんにありました。

時代は「省力化」「効率化」「専門化」「スピード化」など「合理的な利便化」を目指す高度成長期を経て、緑豊かな地方の町も「木よりも鉄、プラスチック」「木や森は負の遺産」「木造よりも鉄筋コンクリート」という風潮となったのも事実です。

こうした社会はある見方では「便利」かもしれません。けれども人にとって「心地よさ」とは何でしょうか。暮らしを起点に学ぶ教育からするならば「不便さには自然に寄り添う心地よい生き方のヒントがある」と読み解くこともできます。「合理的で便利なこと=利便化」の歴史は人々の豊かさを変質させ幸せを奪って来た側面があるからです。

DIYの暮らしが浸透している中欧諸国では、合理化を追求した時代を経て、 今では木などの自然素材を時代に合った形で上手に使う新たな社会が形成されています。学校で「木や森に親しみましょう」「天然素材を使いましょう」 と教えることは重要です。

さらに進んでそれを教える先生やまわりの大人の暮らし、社会そのものの あり方を「今までの暮らし」から「あるべき暮らし」に見つめ直し実践する ことで、それを見る人々や子どもたちへ「自然生活への共感と自分も取り入 れたいという意欲」を伝えることができるでしょう。

### 多様な学び、仕事、生き方

私たちは何らかの仕事に身を置く立場として「産業の振興」を意識し、そ こから生まれる富によって生活を成り立たせています。その産業は自然や人 材を資源として活用しています。そのような意味で、私たちの目に見慣れた 森や木をはじめとする地域の自然は、人々にとって「暮らしの要素」と見立 てられます。

世界を画一化していくグローバリゼーションのもとで拡大した産業構造は、 大規模な災害や世界的な疫病の発生により脆弱性が露呈しています。このよ うな背景にあって木や森をはじめとする地域の自然と共生する暮らし、ローカ ルに根差した無理のない利便性のあり方を見つめることが求められています。

地域の自然、森や人は実に多種多様です。ローカルの強みは小規模に分散 したコンパクトなコミュニティの中の多様性にあります。「森感度」を高める ための学びや人づくりは、その内容が多様であるほど高度な影響を与えるの ではないでしょうか。

その学びの先には、例えば自然の根が広く深く張り種類の違う木々が共存 するように多様な仕事や生き方が待っていることでしょう。多様性のある社 会でこそ「森感度」は育まれ、また森感度を得た人が新たな学びを生み出す

多様性を認め垣根や境界を取り外しあらゆる分断を無くすこと。多様性を 認めることこそ幸せな暮らしの前提です。それを学ぶ多くの機会が、森に恵 まれ自然豊かなローカルにこそ潜んでいるのです。

### ロングスパンで学ぶ

「森感度」を高めるために、暮らしの中の学びや多様な学びをどのように提 供していけば、或いは経験していけばよいでしょうか。少なくとも森の中で、 幼児期や少年期、青年期など、それぞれの成長期に応じた学びが必要と考え ます。

森や木は長い時間をかけて常に変化しています。変化するものの中に身を 置くことは人の成長を促します。答えを早く出す必要はありません。長い時 間軸の中で多様な自然の営みを身体で感じ取る。そうした学びの連続性・継 続性が必要です。

大人になっても森で学べる環境を作ることも大切です。子供と一緒に親も 学ぶ。ついつい固定観念に縛られる大人は学ばなければいけないことも多く あるでしょう。

世代間の価値観の分断を溶かすこと、壁を超えて繋がることが大切です。 そのために森の中で長い時間軸を以って子供も大人も学び続けられる。その ような仕組みの構築・提供が望まれます。「目先の効率性」よりも時間を掛け て遠回りしてでも得られる「地域社会の持続性」に目を向けたいものです。

### 体験を重視する

木や森について学ぶには実際に体験してみることが重要です。危ないこと、 汚いことや面倒くさいことを体験し、その向こう側にある「何か」を実感する。 その過程で、「未知の面白さ」や「新しい意味」、そして「自分自身の成長」 を実感できるでしょう。

雨の中で薪に火をつけて燃やすこと。今の自分の暮らしの中に何の意味が あるのかと問われるかもしれません。けれどもその不慣れで面倒な所作の中 に、自然と共に暮らす知恵、万一の時にも生き抜く術、他にも応用が利くよ うな自然の原理、そして意味のないようなことにも意味があるという「気づ き」があります。

森には、同じ緑に見える中にも多様な色彩があり、鳥のさえずりや風の音、 土や落ち葉などの匂いが入り交じり、手触りや足の裏から伝わる感触も様々で、 キイチゴなどを口に含むこともできます。それは季節や天候で変化し五感を 研ぎ澄ますのにとても適した場所です。

体験することが「自分ごと化」への近道です。森の学びはまずは「遊び」 にあるのではないでしょうか。それが、暮らしの中の様々な「木や森」に関 する知恵・工夫・技につながることで「森感度」が磨かれるのです。

### 生きものに目を凝らす

様々な場面で地球温暖化の影響が叫ばれるようになりました。原因がどこ にあるかはともかく、「何かが変」「これまでと違うことが起きている」など 自分の感覚として異変に気がつくことが重要ではないでしょうか。

キノコ採りのベテランなどは、その年のキノコの出来一つとっても、森の 土壌や生きものの様子などと関連付けてあれやこれや状況分析をされている そうです。自然の変化を察知する力は「森感度」の一つ。

森には様々な植物、動物、鳥、虫などが生きています。そうした生きもの の様子はどうか、森に入ってそれぞれが好きな対象を目当てに変化を感じて 持ち寄ることができれば、伊那の素敵な森の維持に役立つとともに、森があっ て生きものがいるから人間も生きられるという実感を得られるのではないで しょうか。

# (2) 快 = 心地よさ を知る

### 森と住宅

古代より人は森から木材を生産して様々な用途に活用してきました。住宅 などの建築物はその代表格です。例えば一般住宅には、木造軸組工法やツー バイフォー、プレハブ、鉄骨造などの工法がありますし、内装を見ても大壁 なのか真壁か、プリント合板なのか無垢材か、ビニールクロスなのか漆喰か 等々、書ききれないほどの選択肢があります。

「快=心地よさ」から住宅を見た場合、天然素材を多く使うことにより自然 の温もりに癒されるところは大きいでしょう。時代によって素材やデザイン の流行があることや、火災リスクから建築における木材使用を排除するルー ルが長らく運用されていたこともあり、一時は「木の家は古い」という印象 もありましたが、様々なメリットが見直され、有名デザイナーによる設計が 話題になるなど、近年、木の人気は着実に高まっています。

#### 【建築に木を使うメリット】

- ○長持ちする(世界最古の木造建築 = 法隆寺)
- ○断熱性が高い
- ○調湿機能が高い
- ○柔らかさや温かみがある
- ○メンテナンスしやすい
- ○経年変化で味が出る
- ○加工や廃棄の際の環境負荷が小さい
- ○再生可能資源である(木は植えて育てて使える循環型資源)
- ○近くで生産された木の場合、地域の関連産業への経済効果がある
- ○近くで生産された木の場合、地域の森林整備等に貢献できる等々これまで欠点とさ れてきた「ねじれ」や「割れ」など天然素材ならではの課題は、人工乾燥等の加工 技術でカバーされており、火災に対しても、不燃処理などの技術が進歩しています。 これからは、木を使うことのメリットをより多くの人に知ってもらうことに加え、 普及させるために以下のような取り組みを地道に続けていくことも重要と考えます。
- ○木の家と長く付き合っていくための「木を知る」機会(ユーザー向け+建築士向け) の提供→木の長所や欠点、樹種ごとの適材適所やメンテナンス方法などを学ぶ講座
- ○洗練された多様なデザインが生まれる仕組みの構築
- ○木を使うことの効能に関する確かなエビデンスの提示
- ○需要者ニーズを的確にとらえた新たな製品開発
- ○家と森とが繋がったストーリー性の提供○先行事例としての公共建築物の木造・木 質化(上記取り組みを実践)

以上のようなことを積極的に展開し、関係業界やユーザー、行政など多く の人を巻き込んで、「原料を転換すること」(人工素材から自然素材への転換、 外材から国産材・地域材への転換)を意識した取り組みを進めていきましょう。

# 森と道具(什器)

「木の家に住みたい」と思っても気軽に購入できるものではなく一生のうち 何度も買えるものでもありません。仮にマンションでも森や木を感じる暮ら

しは可能です。家具、食器、箱、桶・樽など、木製の道具を身の回りに置き、 使うことによって、「快=心地よさ」は一気に高まるものです。職人が丹精込 めて作り上げた木の製品は、年輪や節の位置、微妙な色合いなど全く同じも のは無く、また、年月を経ることによってその風合いはより馴染んだものと なり、世界に一つ自分だけの愛着のある品となります。

お風呂のふたをプラスチック製からヒノキの板に換えてみたり、ベランダ のコンクリートの床の上に木製スノコを敷いてみるなど、工夫によって様々 な木質化が実現できます。

自分でできるメンテナンスも木製品の特長。DIYの手に負えない状況にな れば、職人さんに頼んで直してもらうこともできます。さらに味が出て愛着 が湧くことでしょう。

木箱、木桶、木樽、木製椀、木製まな板、木製梯子、木製机、木製椅子、 木製棚等々、木製のものには、単語の前にわざわざ「木」や「木製」の字が 付け加えられますが、そもそもそれを付けなくても字そのものに「木へん」 が付いています。プラスチックや金属のものが溢れている世の中を見直した いものです。

それから、従来は他素材だったものを木製・木質に転換するような事例も 出始めています。例えば、高速道路の遮音壁や主要道路のガードレール、縁石、 鉄道車両の内装、畳床、食品のトレー、ストロー等が挙げられます。様々な 分野での木材への原料転換には、新たな技術開発や洗練されたデザイン、低 コスト化に向けた試行錯誤等が伴いますが、こうしたことに果敢にチャレン ジしていくことも重要です。

### 森とエネルギー

私たちの暮らしは電気やガスなどのエネルギー無しに成り立たちません。 電気は原子力や火力、水力など比較的規模の大きな発電所から各家庭へと供 給され、暖房や調理などは、灯油やガス等の海外資源由来のエネルギーを使 うのが一般的です。

こうしたエネルギー利用は、大規模な発電の場合、その安全性や資源の持 続性、周辺の自然環境や地球温暖化への影響などの問題が指摘され、さらに 大規模な災害等により発電所が停止した場合には、影響範囲が非常に大きく なってしまいます。

化石燃料は国際情勢の影響により供給が不安定になる可能性があるだけで なく使用による経済的な影響は海外のサプライヤー等へもたらされます。こ のため自然エネルギーや再生可能エネルギーが注目されており、薪、木質ペ レット、木材チップなどによる木質バイオマスエネルギーの他、小水力発電、 太陽光発電、風力発電などを小規模分散的に行う「エネルギーの地産地消」 が求められています。

日々の暮らしの中で森の価値を感じられるのが薪ストーブやペレットス トーブなどの「森のエネルギー」を利用した暖房です。ゆらゆらと揺れる炎 を見ながら芯から暖まる空間に家族が集って語り合えるような機会は、他の エネルギーでは得られません。

森林を所有していなくても、森林を所有している人とつながったり、地域 の「薪の会」等に加入するなどして、楽しんでいる人も多くいます。今後、 こうした「森のエネルギー」の良さを多くの人に知ってもらい、今よりもさ らにユーザーを増やしていくことで、「森が浸透する社会」を実現できるので はないでしょうか。そのために、例えば以下のような取り組みを展開しては どうでしょうか。

- ○効率的で安全な燃焼機器の開発·普及(煙害等によるアンチバイオマスを無くす)
- ○正しい使い方・燃やし方の普及
- ○太陽光など他の自然エネルギーとの組み合わせ
- ○気密性・断熱性の高い建築(木製サッシの普及等)との組み合わせ
- ○最適なシステム導入に有利な支援を行う補助制度の創設
- ○燃料の安定的な調達のための仕組みづくり
- ○燃料生産販売業、燃焼機器生産販売業、建築業、ユーザー等のネットワーク構築
- ○燃焼機器を導入している公共施設の職員向け「管理研修」の実施
- ○住宅・不動産・建築関係者との連携による小規模地域熱供給事業の事例づくり 等々

「森のエネルギー」が特定の人のためのものではなく、さらに身近に存在す るように大人から子供まで楽しく関わりながらユーザーの環を拡げていくこ とは理想です。

#### 森と風景

木や森は私たちの暮らしの中に日常的な「風景」として存在しています。 遠くに見える山にはじまり、近景では段丘林や河畔林、鎮守の森、街路樹や 庭木など。その周りにある木製の柵や塀なども森や木を由来とする風景とし て溶け込んでいます。

「風景は自分でどうにもできないんじゃない?」と思われるかもしれません。 しかし自宅の庭の木やベランダの花、木の柵や塀、それらは皆、街や集落の 風景を形作っている大切な要素です。放っておけば伸び放題・荒れ放題となっ て外から見る人たちからも美しいものではありません。

現在、森林から人が遠のいてしまい、手入れされない荒れた森の管理が問 題になっていますが、そうした傾向は山の森から里の森へ、集落周辺の森、 家の庭木へとジワジワと浸食しています。

都市型のライフスタイルへの変化や世代交代の中で「木や緑との付き合い」 が面倒になり、あるいは付き合い方がわからなくなっていつのまにか敷地の 中の樹木が大木になどという話はよく耳にします。

今一度、敷地の中や集落周辺の土地に生えている樹木の管理について考え てみる必要があると思います。庭木など行政的には所管部局が明確でなく個 人の管理に任せているのが実情です。「森感度」が高い地域として暮らしの周 辺の樹木に関する自己管理の術を普及する必要があるのではないでしょうか。 その手法はまだまだ手探りになりますが、例えば次のような取り組みはいか がでしょう。

- ○樹木医や造園・土木業、緑化木販売業、林業、特殊伐採業等のネットワーク構築
- ○一般市民からのワンストップ窓口の整備
- ○木や森の景観づくりを総合的にプロデュース、コーディネートできる森林景観キュ レーター(仮称)のような人材の育成、資格制度の創設、ビジネス化の支援等
- ○一般市民向け「身近な緑の環境づくり DIY 講座」の創設
- ○先進的な事例づくりと普及啓発の推進

今課題となっているのは敷地内や集落周辺にある「家の屋根より大きく育 ちすぎた宅地周辺の樹木」。これらは、園芸や造園の世界と林業の世界の狭間 に位置づけられるような存在で、誰に頼めば効率よく解決するのかよくわか らないのが現実です。

こうした空間について樹木や花ごとの性格から始まって、「どうすれば管理 しやすく美しく安全に保てるのか」「自分でできるのか」「プロに頼むのか」「誰 に聞けばいいのか」そのようなことを誰もが承知している状況になれば、今 よりさらにすばらしい緑の環境が広がり、地域を愛おしく感じ、ひいては地 域の価値を向上させるのではないでしょうか。風景づくり・景観づくりにも、 さらに「ひと手間」かけて自分にも周りの人々にも「快=心地よさ」を与え る行いは幸せを引き寄せるでしょう。

#### 森と癒し

「森林浴」という言葉があるように、人は森の中に身を置くことによって心 身のリフレッシュを図ることができます。森の中の爽やかな風や静寂、匂い、 水の音、鳥や虫の声、林内を歩く感触、新緑や紅葉など、私たちは一年を通 して、森から「癒し」を受けることができます。これこそ森による「快=心 地よさ」の真骨頂です。

ドイツには、森林や自然環境での「運動と休養(いわゆる森林セラピー)」、 栄養に配慮した「食事(ハーブ・薬草)」、免疫力に効果的と言われる「温冷水浴」 などを組み合わせた自然保養地の歴史や観光ビジネスがあります。

散策できるような森林、温泉・食事など、伊那市にはこれらすべてが揃っ ています。まさにドイツのような保養型観光ビジネスを展開するための資源 が、伊那市にはすでにあるのです。

観光ビジネスとして発展するには、ドイツのように地元でそれを普通に楽 しんでいる人々の日常が必要です。外へのPRも大切ですが、何より地元の地 域に暮らす私たちがいかに森林から「癒し」の恩恵を受けて健康に生きてい るかということが肝要です。

林内のウォーキングやマレットゴルフ、日帰り温泉のサウナなど、「ああ、 そう言えばもう日課としてやってるよね」ということもあるのではないでしょ うか。しかも露天風呂からは国立公園の山岳景観が見渡せたりするのです。 こんな日課があるなんて誇るべき暮らしですね。都市部の人たちからすれば 実に贅沢。「森の中の焚き火」などは、その時間の使い方も含め夢のような体 験かもしれません。

さらに最近は、こうした森での癒しに加え、木の香りを抽出して、家屋な

ど人工的な空間の中で楽しめるような技術や商品の開発の取り組みが地元高 校生などを中心に行われています。森の中に気軽に入ることが日課とならな いような場合でも、森の香りを部屋の中に置いて癒されることも可能です。 このように暮らしの中の「森の癒し」を少し意識してみると地域の魅力の再 認識ができるのではないでしょうか。

#### 森とレクリエーション

森の中に身を置くことだけでも心身のリフレッシュに効果があることは「森 と癒し でも触れましたが、そこでさらに身体を動かして汗をかいたり、ゲー ムをしたりすることによって、森との距離は近くなります。

マウンテンバイク(MTB)やマレットゴルフ、登山、トレッキング、ツリー クライミング、釣り、カヌー、キャンプ、パラグライダーなど、その楽しみ 方は多彩です。

そんなフィールドが充実している伊那市だからこそ、私たちはこうしたス ポーツや遊びに比較的簡単にアクセスできますし、またそんな地域だからこ そその道のエキスパートや指導者も充実しています。

このような活動を将来にわたって楽しみ続けるためには、そのフィールド となる森林の適切な管理や、楽しむ人たちのルールの遵守、それらを提供す る側の安定した財源や経営基盤、それらの推進エンジンとなる人材の確保・ 育成が必要不可欠です。

それらが、楽しさと活気を伴って持続していけば、逆に森も活気づいて地 域の里山は元気を取り戻すのではないでしょうか。そのためにより多くの市 民が「スポーツや遊びを森の中でEnjoyする」ことができる機会を増やし、 より一層アクセスしやすくし楽しむ人たちの裾野を広げていくことが必要で す。森で過ごす余暇を市民の当たり前の姿に近づけることは「森を考える」「森 感度を高める」ことへの第一歩です。

#### 森と食

森は様々な食材の宝庫です。キノコや山菜、木の実やジビエ(鳥獣肉)など実 に多様です。「口にするもの」という意味では、オウレンやセンブリ、キハダ 樹皮などのような薬用品もあります。薬用酒やクラフトジンの香り付けなど にも森の植物が使われています。

近年は料理に添える葉や枝、花などの利用も注目度を上げています。天然 水は森で生まれ下流の平野へと供給されていきますので、大きな意味では 「食」にとっての起源は森にあるといっても良いのかもしれません。すべての 食材はつながっているということになるでしょう。

「森感度」を高めて暮らしのあり方を見つめなおす。すると新しい「快=心 地よさ」を発見できます。暮らしの中に大きな位置を占めるのが「食文化」 です。伊那市では森や野の食材を調理して食べるという豊かな文化が古くか ら根付いています。田舎で「当たり前」に食べている食材や料理は、都市部 や海外の人たちからすれば驚くような価値ある食文化です。

また育てる・収穫する・採取する・広大な自然環境の中で食す、などの味 そのものにプラスされる体験や情景も料理をおいしくする条件です。そうし た「森のおいしさ」を地元の畑のものや牧場のものなど他の食材もあわせて、 暮らしの中に少しでも取り入れて楽しむことができれば、私たちの「森感度」 は大きく高まるでしょう。

これらは日々の食事とつながっていますからハードルの高い暮らしの姿勢 ではないでしょう。産直市場を探すことは難しいことではありません。森や 野の食材を育てたり生産している人や、農業関係者、食品加工関係者、料理人、 地域のおじいさん・おばあさんなど、様々な人たちの顔の見えるつながりを 強化して、広く情報を共有することもできます。地元の森や野を意識した市 民の食文化が成熟度を増せば、その食材や料理のおいしさは、市民だけでな く、全国や海外にも広がっていくことでしょう。

#### 森と祈り

私たちの暮らしの中には冠婚葬祭など宗教やならわしと密接に関係してい る行事があります。こうした昔から脈々と続く行事や、それに関係する場所・ 物には、森や木と非常に縁の深いものが多くあります。

御柱(おんばしら)や鎮守の森の巨木たちも信仰の対象です。神社仏閣の建 築・修繕の際に使用する木材、神事で使用する榊(さかき)、絵馬、お札、仏事 で使用する仏壇や樒(しきみ)、花木、塔婆、棺桶、迎え火・送り火等の他、正 月飾りやクリスマスツリー、リースなど、大きなものから小さなものまで、 私たちの暮らしが森から遠のいてしまった現代においても、「祈り」に関わる ものには、森を起源とするものが多く使われています。

しかし例えばまとまった量が流通している棺桶などは、中国等海外で製造 された桐製のものが輸入されています。以前は国産のモミやヒノキを使うの が主流でしたが、コストなど様々な点における合理化・効率化が進んだ結果 としてそのようになったのかもしれません。

伊那市では地域材の棺桶を復活させるべく数年前にプロジェクトが結成さ れ製品化が行われました。赤ちゃんの積み木や食器等(ウッドスタート)ととも に棺桶(ウッドエンド)のラインナップを加えることで「ゆりかごから墓場ま で」というストーリーができました。

生と死に向き合う「祈り」の世界だからこそこだわりたい材料というもの もあるでしょう。棺桶の場合なら林業者、製材業者、加工(木工・建具)業者、 葬祭関係者が連携し、そうしたニーズのための選択肢を用意することができ ました。

こうしたこだわりは小さな地域だからこそ可能と言えますし、そのこだわ りは豊かさにも直結します。お盆の迎え火・送り火に使うシラカバの皮も、 店頭にあるものは中国からの輸入品が主流で安価です。こうしたところを地 元産にこだわっても良いのかと思われます。

### 森と創造

森は五感を研ぎ澄ますのに適した場所です。様々な感覚が作用し人間の創 造力を高めてくれます。「森と癒し」や「森とレクリエーション」にも通じま すが、創造を生み出すための場として森林空間をとらえれば、さらにその活 用方法も広がるのではないでしょうか。元来「創造すること」の目的は「人々 に「快=心地よさ」を提供すること」です。

無機質な都会のオフィスでのビジネスを森林空間に移すことによって円滑 に業務が進んだり、商品開発に向けた新たな企画が浮かんだりといった効果 も期待できます。こうしたコンセプトのもとに「森のオフィス」を設ければ、 ワーケーション(リゾートテレワーク)の場として働き方改革や「新しい日常」 を実現することに貢献できます。「たき火」を囲んでの商談やキャンプ接待な ど、「ビジネスの新たな森の活用方法」も多く生まれるのではないでしょうか。

また、創造力を高めてくれるという意味では、森林は芸術分野とも親和性 があります。自然の素材を活用するような芸術作品はもちろんのこと、森で 研ぎ澄まされた五感が作用するような、あらゆる芸術作品の創造にも寄与で きる可能性があります。

このように森の中に身を置くことによって創造力が高まるのであれば、ビ ジネスや芸術分野に限らず、森の活用方法に関する多様なアイデアも、もっ とたくさん生まれてくるのではないでしょうか。

#### 森とDIY

森の価値を再発見して暮らしの中で活かしていくための方法などを、様々 な観点から提案してみましたが、それぞれ観点や分野が異なっていても共通 しているものがあります。それは、暮らしの中で時間や手間を省いて効率的 にやり過ごしていたことを見直し、自らが実行・体験し「ひと手間」かける ことで、自分の暮らしも地域の環境も豊かにできるということです。

日曜大工でのものづくりや修理、庭木の手入れ、森や野の食材を使った手 料理、薪ストーブ用の薪づくりなど、自分でできることはたくさんあります。

合理化・分業化された社会は効率的で便利ではありますが、自らの「生き る力」や「暮らしの知恵」を犠牲にしてきた面もあると思います。木や森に 限らず、暮らしのあらゆる面において「DIY」(DoItYourself)は、これから の時代のキーワードではないでしょうか。

人口減少・高齢化や都市化・グローバル化の弊害が顕在化していく中で、 「DIYな暮らし」が広がることは一つの必然とも考えられます。ホームセン ターや街の金物屋さん・道具屋さんのようなところに行けば、一通りの道具 や材料は入手できます。DIYにこだわりを持ち始めると「次はどんな道具や 材料が良いか」を追求するものです。

それによっては、ホームセンター等で入手できず地元の職人さんにお願い しなければならないものもあるかもしれません。工作やメンテナンス等の技 術を向上させたいと思うようにもなるでしょう。

「DIYな暮らし」がさらに普及すれば、こうした多様なニーズが一層多く生 まれることが予想されます。様々なニーズに対応できる仕組みは「森感度」 の高い「森が浸透する社会」に必要不可欠です。それらは自然の恩恵から来 る「快=心地よさ」を私たちにもたらすでしょう。昔の暮らしに戻ろうとい うのではありません。今こそ官民一体となって、地域に根差した多様なDIY が広く普及するための「新たな仕組みづくり」や「実践講座」などを検討す るチャンスです。

# 3. ソーシャル・フォレストリー都市を実現する仕組みづくり

# 「市民の森」がお手本に

森感度を高めると言っても、市民の皆さんからすれば、どこの森に行けば いいのか、勝手に入って怒られないか、そこでは何が許されるのか、よくわ からないのが現状です。

森林を所有又は管理している側からすれば、「森林を市民に開放するってど ういうことなんだろう?」「こういう人たちなら森の中に来てほしいな」「勝手 にこういうことをされては困るな」とか様々な思いがあると思います。

実際には森林の所有や管理などの権利関係が存在する上で、そこの利用が 可能かどうかのルールが決まりますからケースバイケースと言えますが、市 民側からすれば「まずは簡単に森を感じてみたい」ですよね。

ますみヶ丘の平地林にある「市民の森」(市管理)は、そんな市民の皆さんに 開放された里山空間。一定のルールを守りながら、誰もが散策や自然観察な どを楽しむことができます。ここで催される様々な自然体験イベントや交流 会などに参加すれば、森のことをさらに深く知ることもできます。

すでに森林を所有・管理している人にとっては、これから自らが森林をど のように活用していったらいいか、ヒントを得る場所・機会にもなります。 [市民の森] はこのように一般市民と森林所有者、双方にとって新たな出会い や学びを得られる場です。

誰もが「森感度」を高めるための心地よい「お手本の森」として、その機 能が存分に発揮し続けられるようにしていくことが望まれます。そして「市 民の森 | をきっかけに、他の森でも様々な取り組みが増えていくことが理想 です。

# 「使いたい」と「使ってほしい」をつなぐ

森の良さや楽しさを十分に理解すると、次に「具体的に森の中で独自に活 動してみたい | 「木を利用してみたい | 「森を所有してみたい | などの思いが 生まれます。

一方、山村地域における高齢化が進む中で、「森林を誰かに任せたい」「手 放したい|と思う森林所有者も増えており、「若い人たちが一緒にやってくれ るなら、もう一度山と向き合ってみようか」と考える人もいます。

世代交代が進み、所有森林の場所や境界が徐々にわからなくなってきてい る今だからこそ、「森林所有者ばかりが負担を負わない新たな森林管理のあり 方 | を模索していくことが必要です。

今、里山での多様な地域活動が市内各地で広がりを見せています。また国 の政策として、新たな森林経営管理制度もスタートしています。

このように森林所有者以外の第三者が森の管理に加わるような動きは、今 後ますます必要性が高まるのではないでしょうか。「森林所有者と利用したい

者の思いをつなげる」にはどのような仕組みが良いのか、行政を交えながら しっかり議論してこうした動きが面的に広がっていくよう導いていくことが 必要です。

### 「里山レンタル」など新しい仕組みづくり

今、市内の里山で展開されている「森林整備」や「薪づくり」、「森林教育」 などの地域活動は、これから50年先も脈々と続いていくでしょうか。「熱い思 いの創設メンバーが高齢で引退して後継者がいない」、「開始時の補助金で何 とか運営してきたが収入源がなくなって活動が下火になった」、「森林所有者 がお亡くなりになり、山が借りられなくなった」など、様々なことが起こる 可能性があります。古いものが廃り新しいものが生まれるというのは世の常 ですが、やはり持続性が担保される仕組みが欲しいところです。

その一つとして「里山を利用する新たなビジネス」を立ち上げることがあ げられます。里山利用が地域のビジネスとして成り立つのならば、その活動 は「熱い思いをつなぐ」といった部分に「お金」がプラスされてより強固な 取り組みとなるしょう。未利用の放置丸太から薪を生産して販売し、その収 益を活動経費に充てたり、みんなで晩酌したりといった取り組みは既に始まっ ていますが、例えば、

- ・移住者等に対して「里山レンタル」を行うビジネスを起こす
- ・キノコや山菜などのオーナー制度をつくる
- ・有料MTBコースを整備して運営する

など、様々なビジネスの実践を促進してみてはどうでしょうか。また、多 様な人たちが里山を管理・利用するような活動を「制度化」することも、持 続性を担保する手法の一つとして考えられます。これには行政の公的な関与 が欠かせませんが、林地の貸付制度も含め、森林所有者以外の第三者が行う 多様な森林管理の仕組みとして、全国に先駆けた取り組みを始めるのも面白 いでしょう。

#### 森林所有者にメリットを

多くの人が森に親しんだり利用したりすることは、社会全体が森の恵みを 広く享受する上で必要不可欠です。一方、森林を所有している人からすれば 「なぜ、自分の森を提供しなきゃいけないの?」となります。

概念上では「森は社会全体の共通財産」だと言いつつも、森林の土地や木 は法律上所有者の個人財産で、他人が勝手なことはできません。

前述したような、森林所有者以外の第三者が何らかの形で森に関わりなが ら活動しようとするならば、森林所有者の了解を取り付けて、利用協定や賃 貸契約を締結するなどの約束ごとが必要で、「森林所有者側のメリット」がな いと約束ごとが成り立ちません。

そのメリットとは何でしょう。お金でしょうか?森林管理の労力の軽減で しょうか?財産管理の呪縛からの解放でしょうか?懐かしい山の賑わいや新た

な人とのつながりでしょうか?

きっとそれは、人によって、森によって、その地域や歴史によっても異な るでしょう。いずれにしても森林を所有している人との信頼関係や合意形成 なくして前には進められません。個々の森林所有者のメリットについてみん なで考えてみましょう。

### 事例を積み上げる

どうすれば森林所有者との合意形成のもとで森林の利用を円滑に行えるの でしょうか。そのヒントは市内各地で既に始まっている里山での多様な地域 活動にあるのかもしれません。

「西地区環境整備隊」「西箕輪薪の会」「上牧里山づくり」「諏訪形地区を災 害から守る委員会」「高遠森林クラブ」「森だくさんの会」「NPO法人伊那谷 森と人を結ぶ協議会」「富県茸山整備研究会」「手良森林を守る」「溝口里山創 り隊」「NPO法人森の座」「伊那市フォレスターズクラブ」等々、他にも事例 はたくさんあります。

いずれも、林業関係者や森林所有者のみならず、多様な立場・職種の人た ちが「森を愛する」という思いで集い、様々な活動を展開しています。(伊那 市は、全県的・全国的に見てもこうした活動が多い地域です)

これらに共通するのは、参画のハードルが比較的低いこと。従来の区有林 管理組合のような集落住民限定のものではなく、新たな住民や地区外の人た ちとも緩やかに繋がれる形が特徴です。

また自然保育を実施する保育園や森林教育等に熱心な小中学校等が、地域 住民や森林所有者の理解・協力を得ながら森林を活用しているような事例も 数多く見られます。

こうした第三者が加わった形での「森の自治」とでも言うべき多様な活動 をより一層広げていくには、できる限りわかりやすい形でこれらを可視化す るとともに、事例同士の連携や、成功の秘訣の共有化などを図る必要があり ます。そして誰もがそうした活動に簡単にアクセスできるようになることが 重要です。

### 森の情報をオープンに

森林へのアクセスを簡単にすると言っても、伊那市の中にある森林すべて というわけにはいきません。第三者の立ち入りを禁止している森林や地権者 自らがしっかり管理している森林もあれば、所有者が明確でない森林もある など、その実態は様々です。

伊那市50年の森林(もり)ビジョンでは、市内の森林を「山岳ゾーン」「環境 資源活用ゾーン」「林業・木材生産ゾーン」「山地保全ゾーン」の4つに大きく 区分しています。

こうした広域のゾーニングとともに、その森林の利用形態や機能など、一 般市民の皆さんが一目見てわかるような森林情報が、地区ごとにオープンに なっていると大変便利です。

例えば、「市民に開放されているエリア」「車いすの人でも入山できるエリ ア」「登山やトレッキング、MTBが楽しめるエリア」「薪生産などの地域活動 が楽しめるエリア」「キノコ山で入山禁止になっているエリア」「地元集落住 民が管理するエリア」などの位置が、簡単なルールや連絡先などの情報とと もに公開されていると、森の存在が近くなるでしょう。

土砂災害の危険度や水源など、防災や暮らしとの係わりを知ったり学んだ りするための森林情報も市民にとっては大切です。林業者や行政側が必要と する森林情報(所有者情報等)の精度向上も引き続き重要ですが、一般市民の ニーズを起点とした森林情報を、わかりやすいサイン等でイラストマップ上 に表示するなど、「市民目線での工夫」を凝らした情報提供のあり方も考えた いものです。

### 政策の支援体制をつくる

これまで提案してきたような取り組みは、誰がどのようなきっかけで進め ていけば良いのでしょうか。それはケースによって異なると思いますが、「多 様な人たちが里山の管理を担うための制度化」や「森を提供する側と使う側 とのマッチング」などは、市民自ら行うにはハードルが少し高いため、行政 が主体となる方がスムーズに進むものと思います。

多様な人たちによる里山の利活用を進める自治体は全国に多く見られ、活 動の立ち上げ支援のための補助等がよくあるパターンですが補助金頼みだけ では自立的な取り組みを持続させることは困難です。そもそも「森を提供す る側と使う側のマッチング」まで制度化しているような例は稀です。

そこで森林の「所有」と「管理」の分離を「新たな森林管理のあり方」の1 つとするならば、管理権を誰かに譲渡したいと思っている所有者の森林を一 旦行政(市)が預かり、その森林を利用したい第三者にレンタルするような制度 が考えられます。

すでにこの制度は、国が「森林経営管理法」の枠組みの中で実現できるよ う整備され、令和元年度から全国の市町村でスタート(財源は「森林環境譲与 税」)していますが、あくまでも第三者に管理を委ねる森林は「林業で採算の 合う森林」で、その場合の第三者とは森林組合などの林業事業者、採算が合 わない森林の場合は「市が自ら管理」という選択肢となっています。

森林とそれを取り巻く人々は実に多様でニーズも多彩です。そこで上記の 制度を利用して「市が自ら管理」するような森林の管理権を、一部でも「多 様な利用を希望する者(市民・団体)」に移すことはできないでしょうか。

ルールや財源は必要でしょうし「森林経営管理法」の枠組みからも少し外 れますが、関心のある市民と森林を繋ぐことができる新たな仕組みになり得 ると同時に、森林環境譲与税の使途としても適切だと思われます。

「林業向け」と「市民向け」。いずれにも森林管理権を斡旋できるような「公 的森林バンク機能」が構築できれば、市民の森感度は間違いなく高まるでしょ う。「市民農園」のように里山を気軽に借りたい人は多くいるはずです。

新たな仕組みを構築していくためには「政策のイノベーションは必要不可 欠」です。伊那市50年の森林(もり)ビジョンが目指す姿を市役所の中で共有し、 各部局が組織の壁を越えて、より一層連携して取り組めるような仕組みの中で、 官民・異業種が一体となって、目標とする地域社会づくりを進めていく必要 があります。

### 顔が見えるネットワーク

どんなに情報化社会が進展しても、森に関わる人同士の「顔が見える」繋 がりなくして森感度を高めることは困難でしょう。

市内には、森や木に関わっている様々な人たちがいます。林業や木材産業 のスペシャリスト、森の恵みを活かして多様なビジネスを展開しているプロ フェッショナル(飲食業、観光業、建築業、デザイナー、燃料供給業、芸術家、 木工作家、……)、行政関係者、研究者、自然保育実践者、学生、地域活動の 仕掛け人・役員、森林所有者(様々な職種の人たち)など、実に多彩です。

現在も、すでにこうした人たち同士の「顔が見える」緩やかなネットワー クがあります。今後、そうしたネットワークによる新たな繋がりをより一層 広げることで、森や木の理解者をどんどん増幅させれば、持続性のある森感 度の高い社会を実現できるのではないでしょうか。

### 森林イノベーションのメッカへ

「イノベーション」とは、産業技術開発など事業者を起点とする様々な「変 革」のことをいいます。従来の考え方に加え、ユーザー・需要者・市民のニー ズを起点とするものも含めた大きな概念の「変革」を指します。

「森林イノベーション」とは、様々な森の恵みを活用して暮らしやビジネス に生かすための技術や仕組みの「変革」です。そこにはセットとして「学び」 も含まれます。

森の価値が地域をめぐる「森が浸透する社会」を作るためには、「暮らしを 起点とした学び(人材育成)」や、「森の恵みを活用する多様なビジネスの創造 (起業)」が必要不可欠で、それらによって森感度の高い人たちの社会が形成さ れると考えています。

逆に言えば、そうした地域社会においては「森や木に関わる学び(教育)」や 「イノベーション創出の仕組み(研究開発・起業支援・需給マッチング・ネッ トワーク構築等)」が、コンパクトに用意されているということです。

そのような地域はフィンランドのヨエンスー市のように海外には存在しま すが、国内ではまだ存在していません。(ヨエンスー:森や木に関わるイノベー ションのメッカとして、専門教育機関や大学、関連企業、公的研究機関等が 集積し、世界中から人材が集結しているフィンランドの地方都市)。

伊那市及びその周辺には、「信州大学農学部」「上伊那農業高校」などの森 林・林業に関係する教育機関がすでにあり、さらに足を伸ばせば、「県林業大 学校(木曽町)」「木曽青峰高校(木曽町・旧木曽山林高校)」「県上松技術専門校 (上松町・木工科等)」「県林業総合センター (塩尻市・試験研究指導機関)」な ど連携できる関係機関があります。さらには民間の取り組みとして実践され

てきた「KOA森林塾」などにより、木や森の仕事を目指して地域外から多く のIターン者が伊那の地に定着し、就業・起業しています。最近では「伊那谷 フォレストカレッジ」など新たな人材養成の取り組みも始まっています。

加えて伊那市では、小中学校における「学校林」を活用した森林教育や、 幼児期の自然保育も盛んです。こうしたことは、幕末高遠藩の藩校「進徳館」 から「日本林学の祖」と呼ばれる中村弥六(日本初の林学博士)や「学校林の父」 と呼ばれる伊沢多喜男(官僚・政治家)が輩出されたことと関係するのかもしれ ません。

以上のような基盤・素地がコンパクトに集積した伊那市のような地域は、 全国的に見ても稀でこれらを活かさない手はありません。今後はこうした基 盤の1つ1つを今まで以上に有機的に繋げて連携を強化するとともに、多様な スモールビジネスを多く生み出すための起業・創業支援など、イノベーショ ンの創出をより意識した仕組みや拠点を創造していく必要があります。

そうすれば、伊那市は全国随一の森林イノベーションのメッカとなって、 競争力の高い地域を形成するとともに、森感度の高い市民ぐるみの、理想的 な「ソーシャルフォレストリー都市」が構築されるでしょう。

### 産学官民の連携

森林イノベーションを進めるためには、林業や木材産業が「縦割りの意識 を破ること」「異種と連携すること」が必須です。これは行政機関や学術研究 の世界も同様です。

森や木の世界は多種多様で人の暮らしや営みも同様です。「森が浸透する社 会 | を作ると言っても森や木のことだけに関わっていればすべてが回るわけ ではありません。社会への広がりを目指すのならば森や木の世界だけに閉じ こもっていては限界があります。

未来の社会は「多様性の中で発展していく」ものです。職業や専門、世代 や性別、人種、それぞれ違っていても互いに尊重し合い、連携すれば解決方 法は無限にあるでしょう。私たちの世界は異種が繋がって成り立っています。

水源の水が多様な環境を経ながら川上から川下へと流れていくように、様々 な分断を解きほぐし、多様性を尊重しつつ、産学官民連携や様々な職種によ る異種連携を進めていく実例はあります。

推進には「連携の形」が大切です。「連携を呼びかける側=主」(例えば行政)、 「連携を呼びかけられる側=従」(例えば民)の両者に同じだけの多様性が求め られます。民間は性格的に多様性はありますが脆弱です。推進する行政は力 はありますが縦割り構造になりやすいものです。両者が同等の多様さで協力 するのは森林イノベーションに不可欠な要素です。

森・人・美